

草の芽句会たより

NO,99
28,11,3

誇らしく名札も揺れて菊花展
散りもみじ萩の広場の箒目に

範子

遠来の友と語り初時雨
散り残る十月桜や手の届く

純子

すし店ののぼり打ち振る秋の風
松ぼっくり拾ふ母と子文学碑

節子

噴水の秋の日射しの玉と散る
子供連れ多き城山文化の日

貞子

遠き日の十一連隊碑落葉舞ふ
秋晴れの出産祝送りけり

禮子

手の届く高さに咲いて冬桜
落ち葉踏む若者らしき音たてて

剋子

足もとを流るゝ水や紅葉杖
山黄葉崖にすぎりし二三軒

文子

いたわられる淋しさに秋深む
古びたる季寄せ繕う秋の夜

貞

出席者 氏家 吉崎 馬場 森 川原 小山
投句者 真鍋 大黒

城山の空は青く澄んで高く延びる石垣の稜線がひととき美しい。大手門広場では恒例の菊花展。「菊を育てるのはそれは大変なことなんで」そんな声を聞きながら、丹精の花を見て回る。今日のお目当ては二の丸跡の冬桜。期待に違わず今年も繭色の可憐な花が枝先に二輪、風に揺れていた。石に腰をかけ、遠くに瀬戸の海を眺めながら深まる城山の秋を堪能する。櫺林を抜け堆い落ち葉の径を辿る。アキノキリンソウが金色の花をつけている。漆林の桜紅葉のきれいなこと！ 次回は納句会、会報も100号となる。全員参加を期待したい。

